

## ■ 藺田 郁「近代日本の語り芸と人形芝居に関する研究—地方における大衆芸能生成の視点から」

本年度の研究課題は、報告者がこれまで行ってきた東北地方の人形芝居（猿倉人形）の研究成果を踏まえ、他地域の類似する芸能ジャンルとの比較研究を通じて、近代日本における大衆的な語り芸の成立・展開の様相を具体的に明らかにすることである。この課題に基づき、本年度は明治十年代に高知県で成立し、四国・九州を中心に西日本で興行活動を展開した西畑人形と、明治初中期に名古屋で隆盛し、東海地域を中心としながら全国的な興行活動を展開した説教源氏節を調査研究の対象とした。以下、この二つに関する活動報告を記す。

西畑人形については、高知市春野郷土資料館に所蔵されている西畑人形に関する一次資料の調査を行い、上演形式に関わる台本のほか、興行活動に関わる資料を確認することが出来た。西畑人形の上演形式は、主に義太夫と浪曲を地方としたものに分けられるが、浪曲についてはこれまでほとんど言及されていない。今回調査できた資料は、浪曲による人形芝居のなかでもっとも盛んな活動をした朝日若輝一座のものが多く、これらの資料を精査することで上演形式の解明が進むと考えている。また現地調査では古くから朝日若輝一座に在籍する三代目朝日若輝氏に聞き取り調査を行った。西畑人形が盛んに行われた時期を知る人物であり、また人形遣いである同氏からの聞き取りによって貴重な情報が得られた。今後は現地調査を引き続き行いつつ、今回得られた資料を元に上演形式と興行活動との関連性に焦点を定めて研究を進めていく予定である。

説教源氏節については、平成 29 年度カワイサウンド技術・音楽振興財団の研究助成（音楽振興部門）を受け、東海地域および広島（廿日市）において現地調査を行い、特に東海地方における興行活動の把握を試みた。現地調査を通じて明らかになったことは、東京での短期かつ急激な興行活動の増加とは異なる、東海地方を中心とした長期的かつ広範な拡がりと言教源氏節受容のあり方についてである。とりわけ説教源氏節を受容する多くが単なる聴衆ではなく、自らも説教源氏節を語る人々であることが明らかとなり、このことは大衆的な語り芸としての説教源氏節の再評価に繋がると考えている。これらの成果の一部は、当研究センターによる口頭発表の中で取り上げたほか、2018 年度に刊行予定の論考にも掲載される。また次年度の伝音センター「説教節を聴く」(2018 年 6 月) でも改めて取り上げる予定である。今後は現地調査で明らかになった台本や音源資料から特に上演形式についての調査研究を進めていく予定である。

### ◆関連する口頭発表

- \* 2018.2.13 “Narrative and puppetry: Sekkyo-bushi and regional puppetry”, KATARIMONO WEEK、日本伝統音楽研究センター

### ◆講義・講座等

- \* 2017.4-2018.3 日本伝統音楽演習 d I・II・III・IV
- \* 2018.3.22 平成 29 年度第 9 回伝音セミナー「音曲萬歳を聴く」日本伝統音楽研究センター

### ◆資料・調査など

- \* 2017.4-2018.3 説教源氏節に関する調査(名古屋市立図書館、豊橋市立図書館、広島県廿日市他)(平成 29 年度

カワイ・サウンド技術音楽振興財団による研究助成金に基づく)

2017.7.15-17

- \* 高知県高知市春野町、春野郷土資料館にて西畑人形に関する現地調査。

- \* 香川県三木町にて西畑人形の演者、池原由起夫(三代目朝日若輝)氏などへの聞き取り調査。人形芝居の上演記録。

### ◆対外活動

- \* 2017.10 京都造形芸術大学 非常勤講師
- \* 2017.9-2018.3 畿央大学 非常勤講師

## 竹内 直「日本の作曲における伝統音楽と創作との関わり——民謡にもとづく創作を手がかりとして——」

日本の近現代の作曲における伝統音楽と創作との関わりは、作曲家の伝統音楽に対する捉え方が多種多様であるという点で興味深いテーマである。報告者は2015年度より作曲家松平頼則（1907-2001）と伝統音楽との関わり、とくに松平の創作初期（昭和初年から10年代）の東北民謡との関わりを中心に調査、研究を進めてきた。松平に関する決して多いとは言えない先行研究の大部分は戦後の雅楽と12音技法との関わりについてのみを扱っており、創作初期の東北民謡との関わりについて論じたものは皆無に等しかった。本年度はここ数年の松平と東北民謡との関わりに関する研究の成果を2017年度に刊行予定の論文、学会発表およびCDの制作という形で公表することができた。次年度は、引き続き松平と伝統音楽との関わりについて、とくに雅楽にもとづく創作を中心に調査、研究を進めていきたい。

録音にけっして恵まれているとはいえない日本の作曲家の作品を演奏者の協力を得ながら実際に音にするという試みは、報告者が研究の一環として2014年度より取り組んでいる課題だが、本年度は2016年3月にiTunes等で限定的にリリースした松平頼則の音源をCD化し、さらに松平の初期の活動に関する詳細な解説を付した。松平に限らず、録音がない作品を音にする試みは、研究活動と並行して今後も継続していきたい。次年度中には第2弾のCDをリリースする予定となっている。

日本の作曲における伝統音楽と創作との関わりという研究課題に関しては、2017年6月にオーストラリアのウーロンゴン大学で行われた豪州日本研究学会で沖縄出身の作曲家金井喜久子（1906-1986）とポストコロナル・アイデンティティをテーマに研究発表を行ったほか、戦前・戦中期の日本で活動した台湾出身の作曲家江文也（1910-1983）が日本の祭り囃子の旋律やリズムを取り入れて作曲したフルート曲を収録した『中国長笛物語』（演奏は、本年度末に本学音楽研究科博士後期課程器楽領域を修了した田呈媛氏）の録音監修も行った。

最後に本研究センター内での活動を報告する。該当年度は平成29年度伝音セミナー第3回「日本の作曲家を聴く（その3）～レコード『「平家物語」による群読 知盛』を聴く』を担当した。セミナーでは、『平家物語』をもとに劇作家の木下順二（1914-2006）が台本を構成し、そこに作曲家佐藤慶次郎（1927-2009）が音楽を付した『群読 知盛』の録音を抜粋で取り上げ、古典作品の群読と佐藤の音楽が織りなす世界を紹介した。

### ◆関連する執筆

\* 2017.8 解説「ピアニスト松平頼則と《幼年時代の思い出》」『Souvenirs d'enfance』Bel Oiseau, BEO-001 (CD).

### ◆関連する口頭発表

\* 2017.11.12 「松平頼則の創作における採譜の位置づけ」東洋音楽学会第68回大会、沖縄県立芸術大学。

\* 2017.6.28 “Post-colonial Identity in Okinawa under the United States Occupation: seen through the composer Kanai Kikuko (1906-1986)”, The 2017 Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia, University of Wollongong, Australia.

### ◆講義・講座等

\* 大学院音楽研究科：日本伝統音楽研究 fl・fIII、日本伝統音楽研究 flI・flV、音楽学特殊研究 mlI・mlV

\* 音楽学部：音楽学特講 m

\* 2017.7 平成29年度伝音セミナー第3回「日本の作曲

家を聴く（その3）～レコード『「平家物語」による群読 知盛』を聴く』

### ◆資料調査

2017.8.21 和歌山大学附属図書館資料調査

2017.12.16-17 上野学園大学図書館資料調査、東京文化会館音楽資料室資料調査

### ◆その他

\* 2018.3 『Un Trabajo del Progresor Usaburo Mabuchi de 1976—グアテマラ高地チャフル・イシルの縦笛と両面太鼓』柿沼敏江監修、滝奈々子・竹内直共編、京都市立芸術大学芸術資源研究センター。

\* 2018.3 『中国長笛物語』CD監修、Chengyuan TIAN.

\* 2017.10 寄稿「作品に再び息が吹き込まれる瞬間」『La Pléiade (奈良ゆみ友の会)』pp.2-3.

\* 2017.8 『Souvenirs d'enfance (幼年時代の思い出)』CD制作・監修、Bel Oiseau, BEO-001.

## 出口 実紀「フィールドワークに基づく民俗音楽・芸能調査」

今年度の日本伝統音楽研究センターにおける研究活動は、フィールドワークによる民俗音楽・芸能調査を主とする。具体的には、岐阜県揖斐郡と奈良県五條市で傳承されている太鼓踊りを対象に調査をおこなった。

岐阜県揖斐郡揖斐川町では現在 15 地区の太鼓踊りが傳承されており、地区ごとに踊り歌の形式が少しずつ異なっている。調査に入った地区では音頭取りもしくは歌い手による歌の部分と、歌が付かず囃子と踊りによる部分が明確に分かれており、その両者を組み合わせて踊り歌が構成される。踊り歌の形式や踊り手（太鼓打ち）の隊形から、今後は近畿圏や周辺の太鼓踊りとの関係についての調査が必要であり、太鼓踊りに関わる自治組織等についても引き続き調査をおこなう。奈良県五條市でおこなわれる篠原踊りでは、現在、天満神社で奉納される「式三番」と呼ばれる 3 曲の踊り歌が傳承されている。昭和 56 年の歌本によるとかつては 30 数曲の踊り歌があったと考えられるが、踊り手の人数が減少したため現在では踊り歌の多くが失われている。そこで、平成 25 年度より傳承に向けての取り組みが始まり、篠原踊り保存会によって傳承可能な 17 曲の踊りについて練習が進められている。今年度は、昭和 38 年の音源を使用して田畝智志氏の協力のもと 17 曲の採譜資料を作成し、報告書に掲載した。

最後に、伝音セミナーおよび伝音センターの催しに関する活動内容を報告する。平成 29 年度第 7 回伝音セミナー「田邊尚雄が巡った沖縄」では、田邊尚雄が大正 11 年におこなった沖縄音楽調査をテーマに取り上げた。というのも、当センターの田邊コレクションの中には田邊が沖縄調査で実際に使用した写声蓄音器が所蔵されており、LP「南洋・台湾・樺太諸民族の音楽」（1978 年、東芝 EMI）に大正 11 年 8 月 2 日に田邊が石垣島で録音した音源が収録されている。そこでこれら貴重な資料を活用し、セミナーでは田邊自身による調査記録をもとに調査行程を辿りながら、現地視聴した民謡の数々を紹介した。田邊の記述をみていくと、以前から沖縄音楽に関心を寄せていた田邊が山内盛彬や柳田国男らの協力を得て調査が実現する経緯や、沖縄での田邊の歓待の様子が分かり、当時の沖縄の人々が自分たちの島の音楽を田邊という著名な研究者が調査することに対し誇りをもって受け入れていることがうかがえた。その他、2018 年 2 月 9 日から 13 日までおこなわれた語り物 Week の関連行事では、「沖縄の民謡」と題した発表をおこなった。報告者が過去におこなった八重山民謡調査の事例を挙げながら、沖縄民謡における歌詞の多様性や即興的要素、毛遊びにみられる歌を掛け合う行為について紹介した。

### ◆関連する執筆

- \* 2019.03 「第七章篠原踊りの音楽」『篠原踊り解説書 歌と踊りの歴史 2018』

### ◆講義・講座等

- \* 大学院音楽研究科：日本伝統音楽演習 eⅠ・eⅢ、eⅡ・eⅣ
- \* 2018.01.11 平成 29 年度伝音セミナー第 7 回「田邊尚雄が巡った沖縄」
- \* 2018.02.13 語り物 Week 「沖縄の民謡」

### ◆資料・現地調査等

- \* 2017.05.14 奈良県葛城市にて當麻寺練供養会式調査
- \* 2017.06.24 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて太鼓踊りの歌本調査
- \* 2017.08.16 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて太鼓踊り調査
- \* 2017.10.08 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて太鼓踊り調査
- \* 2018.01.21 奈良県五條市にて篠原踊り調査
- ◆関連する口述活動
- \* 2017.11.19 第 37 回近畿高等学校総合文化祭大阪大会 郷土芸能・吟詠剣詩舞部門における講評
- \* 2017.12.16 「巨勢山口神社」、「稲宿御霊神社」、奈良県御所市スキ提灯調査報告会

## 大西 秀紀 「平成 29 年度伝音セミナー使用曲」

平成 29 年度の「伝音セミナー 日本の希少音楽資源にふれる (全 9 回)」について、報告者は第 1 回を担当した。その内容は次の通りである。

## ○第 1 回 京都のうた (その 3) 2017.05.11

「京都のうた」の 3 回目は、京都府下の「峰山小唄」「綾部小唄」「八木音頭」「久美浜節」といった御当地ソングを始め、「市立葵小学校校歌」「京都市消防の歌」「京都市歌 (オーケストラ版)」、宮川町「京おどり」のフィナーレを飾る「宮川音頭」などをお聴き頂きます。「今回のテーマは京都府下の各地にまつわる唄です。戦前・戦後の二つの京都市歌をはじめ、昭和になって盛んに作られた伏見小唄、宇治音頭、西陣音頭、新舞鶴小唄などのご当地ソング、元々は映画主題歌だった祇園小唄、鴨川小唄、嵐山小唄、さらに福知山音頭の大正 4 年の歴史的録音など、盛り沢山な内容でお届けいたします。(広報チラシより)」

- |  |   |
|--|---|
| 1 新小唄 久美浜節<br>唄 敏香、三絃 梅松、替手 松井千稔<br>オリент 60568-A (昭和 6 年 9 月発売) | 7 京都祭<br>唄 藤村一郎 (楠木繁夫)<br>テイチク 5590-B (昭和 8 年 11 月発売)                 |
| 2 新小唄 峰山小唄<br>唄 吉弥、三絃 政奴、他 鳴物連中<br>オリент 60923-A (昭和 7 年 6 月発売)  | 8 京都市消防の歌<br>唄 林達次、藤田由起子<br>日本録音文化協会 H-217B (昭和 30 年頃発売カ)             |
| 3 新小唄 綾部小唄<br>唄 生野静子<br>オリент 60853-B (昭和 7 年 4 月発売)             | 9 葵小学校校歌「葵の花の」<br>歌 葵小学校児童カ<br>日本録音文化協会 X-1088 (昭和 27 年 10 月録音)       |
| 4 園部音頭<br>唄 豆千代、藤島恒夫<br>タイハイ M-181 (昭和 26 年制作カ)                  | 10 おとぎ音頭<br>唄 岡田玲子<br>テイチク C-99 (昭和 30 年頃の制作カ)                        |
| 5 八木音頭<br>唄 藤浦千恵子、神戸コーラス<br>タイハイ M-826 (昭和 28 年制作カ)              | 11 独唱と管弦楽 京都市歌<br>京都市立堀川高等学校<br>音楽専攻並ニ音楽コーラス<br>テイチク P-74 (昭和 26 年制作) |
| 6 京都音頭<br>唄 先斗町栄二、三絃 定勇、市助<br>テイチク 5590-A (昭和 8 年 11 月発売)        | 12 《映像》宮川音頭<br>宮川町芸妓連中<br>DVD 制作・宮川町歌舞会                               |

## ◆関連した執筆

- \* 2017.07 「京都のレコード会社 東洋蓄音器・オリエントレコードについて (例会発表要旨)」『藝能史研究』、No.218、藝能史研究会
- \* 2018.03 「二世豊竹古靱太夫 (山城少掾) の「摂州合邦辻」」『舞台芸術 21』、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター

## ◆関連した口頭発表

- \* 2017.09.16 「町田佳聲と古曲保存会レコード」、2017 年前記でんおん講座 F 三味線音楽研究—町田佳聲をめぐって、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
  - \* 2018.01.28 「コロムビア大広告塔の出来るまで」、大阪芸能懇話会、難波生涯学習センター
- ◆音源提供
- \* 2018.03.01 高橋葉子「オリエン트의謡曲 SP レコードを聴く」(第 8 回伝音セミナー)



## 神津武男「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は前年度に引き続き、(1) 山田智恵子先生の研究課題「義太夫節 伝承を失った曲の復元研究とその展開」の研究協力者として参加したことと、(2) 自身が研究代表者を務める研究課題「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」を遂行したこと、の2点である。

(1) の研究課題は、人形浄瑠璃文楽がこんにち伝承を失った演目・場面を、近年新たに所在が判明した史料群(配役書入本)に残る楽譜「三味線譜」を活用することで、国立劇場での文楽公演でも復活されずにきた段・場面の復元を試みる、というものである。山田智恵子先生と太田暁子先生との研究会を進め、『祇園祭礼信仰記』二段目切「けし島」の復曲を終えた。

(2) の研究課題では、新たに人形浄瑠璃関係史料の所在を把握した機関や筆者のその後の研究の進展によって再調査の必要が判明した機関について、人形浄瑠璃関係史料の所在調査・書誌研究を進めて、〈浄瑠璃本〉書誌データベースと〈人形浄瑠璃番付〉書誌データベースの、ふたつのデータベースについて一層の充実と精度を向上させることを目指す。浄瑠璃本について新たに調査した機関は、青森〈1〉、岩手〈1〉、福島〈1〉、東京〈1〉である(〈〉内は機関数)。人形浄瑠璃番付について新たに調査した機関は、東京〈1〉、である。

(2) の研究成果報告として、伝音センター7階の展示スペースにて、「京都と人形浄瑠璃」展を開催させていただいた(会期:2017年12月14日~2018年4月16日)。こんにちややもするとその結び付きを忘れられている、京都という土地と人形浄瑠璃文楽・義太夫節との強い繋がりというものを、京都に拠点を置いた浄瑠璃本板元や、太夫・三味線弾きの存在を通して、確認してみようという試みであった。3代竹本綱太夫(通称・鉛屋)は、文化・文政・天保期に活躍したひとで、綱太夫の名跡の中では初めて紋下太夫へと登り詰め、いまにその紋を綱太夫の紋として継承させるほどの偉人であるが、同人の活動拠点が京都にあったために(番付などの史料が乏しく)、その活動の全容が知られて来なかった。筆者の調査によって近年判明したところとして、同人には添削活動(既成の旧作に添削を施し、多く一幕物として再生させる)があって、その代表作を3代綱太夫の遺影の前に御供えすることを展示のメインと定めた。『時雨の炬燵』『紙屋内』を豊竹呂勢太夫氏、『関取千両幟』『猪名川内』を西村公一氏、『本朝廿四孝』『勘助住家』を人形劇の図書館・瀧見英明氏から特別出品いただきました。

また3代綱太夫の遺影は、女流義太夫の「竹本綱吉」の代々に継承されていた。かつて4代竹本綱吉氏のHPに画像が公開されていたので、今回4代綱吉氏の御遺族(中村紀代子様、向坂佳子様、向坂真理子様)皆様へ出品協力を願った。経年の劣化が原因と思われる掛軸の上部、標木・八双の直下に裂傷が生じていたので、史料そのものの出品は断念して、展示ではほぼ実物大の、デジタル画像での紹介になったが、筆者は感慨無量であった。同展示は、京都新聞2018年1月26日朝刊に「人形浄瑠璃 京は聖地だった」「市立芸大三世綱太夫らに光当て企画展」として紹介されたことを申し添えたい。

3代綱太夫の添削活動にみるように、こんにちの人形浄瑠璃文楽・義太夫節には口伝を失っていたとしても、確かに京都の劇団系統に始原をもつ伝承が流れ込んでいる。近代には文楽と非・文楽の二系統として意識されるところの、非・文楽の系統の源流は、江戸時代の京都にあったのだろう、と筆者には思われる。

### ◆関連する執筆

\* 「江戸板六行本「大字遊下本」の効用 ― 義太夫節・人形浄瑠璃文楽の現行本文の成立時期を辿る手掛かりとして ―」(『早稲田大学高等研究所紀要』第10号、早稲田大学高等研究所、2018年所収)。

\* 「『関取千両幟』『猪名川内』現行本文の成立時期について ― 本文と「櫓太鼓」「曲引」演出の三次の改訂とその時期 ―」(『歴史の里』第21号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2018年所収)。

## 高橋 葉子「能の部分演奏の歴史と技法に関する研究」

平成 29 年度の日本伝統音楽研究センターでの主な研究活動は、昨年度に引き続き次の二件、1、科学研究費助成事業（基盤研究 C）研究「能の略式演奏の歴史と現在—新しい演出形態を構想するために」（平成 28～30 年度）、2、プロジェクト研究「音曲面を中心とする能の演出の進化・多様化」（研究代表者藤田隆則）である。

1、科研費助成研究は、能の部分演奏（「素謡」「囃子」「一調」等）、および能の省略上演を対象に、それぞれの受容・発展の様相と、形態・技法の体系化の歴史を明らかにすることを目的としている。29 年度は主に以下の四点の活動を行なった。① 28 年度に発表した、江戸後期から大正期まで存在したヨウ吟「ウキ節」について、伝音センター研究紀要第 14 号に研究ノートとして執筆した。その後、この節を証明する音源（謡大西新三郎）を大西秀紀氏から提供いただき、3 月の伝音セミナーにおいて紹介した。② 28 年度に実施した素人愛好家インタビューの記録の補綴と文字化作業を行なった。これらは昭和後期を中心に、現在では見られなくなった家族能や家族囃子会の貴重な記録である。未だ途中段階であるが 30 年度の報告書作成に向けて作業を進めている。③ 近代初の直シ（節付の記譜）入り謡本の刊行者「梅洲」について調査を行ない、これまで詳細不明で玄人と推測されていた「梅洲」が梅若派の素人であることを明らかにし、近代謡本の体系化と普及に素人の謡愛好家が貢献した具体例として紹介した（武蔵野大学能楽資料センター紀要）。④ 伝音センターとジュネーブ高等音楽院の共同研究プロジェクト「語り物の比較研究」（研究代表者：時田アリソン、Francis Biggi）のワークショップに、時田氏、藤田隆則氏と共に参加した。藤田氏は、能の戯曲構造と音楽構造の関係および音楽技法をテーマとしてワークショップを行ない、高橋は実技面での補佐を担当した。また最終コンサートにおいて、藤田氏と共に略演式を創作・演奏した。

2、プロジェクト研究「音曲面を中心とする能の演出の進化・多様化」では、音曲研究会 3 月定例研究会において、同会メンバーの長田あかね氏と共に「観世文庫所蔵の謡伝書『観世流謡学掲的』」の発表を行なった。同書は観世一学（日吉市十郎。十五代観世大夫元章の娘婿）の弟子で小浜藩士の春鳥齋東湖散人なる人物による謡伝書で、明和・安永頃の観世一学・元章の謡い方や、京都の謡に関する逸話等が記録されている。発表では、同書の音楽記事の解説を行ない、一学・元章・林喜右衛門らの言葉や稽古の様子を伝える同書の希少性や、謡の多様性に対する家元側の寛容な態度を指摘した。後者は流儀統制が強力に推進された近代の状況と対比すると非常に興味深い現象である。

新年度は科研費助成研究の最終年であるが、一調、素能の歴史について予定していた論文執筆が遅れているので執筆を急ぎたい。また、科研費・プロジェクトの両研究を通じて、能の部分演奏の最も大きなジャンルである素謡に関して、謡伝書の伝承項目の歴史的整理と、より精密な読解の必要性が認識されるようになった。科研費研究をまとめつつ、次の課題として取り組んでいきたい。

### ◆関連する執筆

- \* 2017.06 「近代観世流のフシの統一—ウキをめぐる」日本伝統音楽研究センター研究紀要『日本伝統音楽研究』第 14 号
- \* 2018.03 「梅若派謡本刊行者「小 梅洲」」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 29 号

### ◆その他の執筆

- \* 2017.12 資料キャプション「京都観世会浅野文庫展示」主催京都観世会
- \* 2018.03 講座記録「笛方が語る狂言の音楽」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 29 号
- \* 2018.03 書籍紹介「無辺光一片山幽雪聞書」『紫明』第

### 42 号

### ◆講座・ワークショップ

- \* 2017.08 「笛方が語る狂言の音楽」（能楽森田流笛方松田弘之氏へのインタビュー）武蔵野大学能楽資料センター公開講座
- \* 2018.03 「オリエントの謡曲 SP レコードを聞く」平成 29 年度第 8 回伝音セミナー
- \* 2017.09 ジュネーブ高等音楽院・日本伝統音楽研究センター共同研究プロジェクト「語り物の比較研究」（研究代表者 Francis Biggi、時田アリソン）におけるワークショップ（講師藤田隆則）、およびコンサート「Oulomenen—warriors tales on the Silk Road」での演奏。

\* 2017.12 状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト  
3、ワークショップ「能楽の五人囃子を体につしとる」  
での実技指導（講師藤田隆則）

◆共同研究

\* 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 課題番号 16K02245  
研究課題「能の略式演奏の歴史と現在—新しい演出形態を  
構想するために」：研究代表者（研究分担者藤田隆則）

\* 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 課題番号 16K02336

研究課題「能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相  
—『入門者摘録』研究」：研究協力者（研究代表者三浦裕  
子）

\* 成城大学民俗学研究所共同研究事業「浅野太左衛門家旧蔵  
資料の総合的研究」：研究協力者（研究代表者大谷節子）

◆対外活動

武蔵野大学能楽資料センター 非常勤研究員

## 丹羽 幸江「祝詞の音楽研究と能の楽譜研究」

### 1、祝詞の音楽研究

課題研究「祝詞の音楽の研究」では、日本最古の歌の一つである祝詞がかつてどのような音楽性をもって唱えられていたのかを明らかにすることを目的としている。最終年度である28年度には、神道の祝詞そのものではなく、祝詞から影響を受けた周辺芸能での祝詞などの唱え方を調べ、研究全体の補完を行った。祝詞がいかに日本語の文章を伝える工夫をしているのかを様々な事例により概観することとなった。

まず、声明における講式という語り物声明に注目した。講式は日本語で仏の教えを説く物語形式の声明であり、四座講式（真言宗）や六道講式（天台宗）がよく知られている。それ以外に明神講式という、高野山山内で高野明神を讃える明神講において伝承されてきた講式がある。明神講式は、神仏習合時代の名残から寺院神道の影響を色濃く残している。唱え方も「祝詞読み」という通常とは異なる特殊な唱え方がなされる。

口頭発表「真言宗南山進流の明神講式から祝詞の旋律を考える」（東洋音楽学会第68回全国大会）では、明神講式を真言宗の代表的講式である四座講式との違いを楽譜、録音の両面から比較し、「祝詞読み」とは何かを考察した。両講式には記譜法や本文の節付にも大きな違いはない。岩原諦信は早いテンポで唱えられるのが「祝詞読み」であると述べたが、録音の分析をもとに、テンポがアップしたことにより、歌詞の二音節での一単位を形成するリズムが形成されていることを指摘した。従来の漢文基調の講式とは異なる、和文であることを留意した言葉のリズムが祝詞読みではないかとの結論に達した。

つぎに論文「能の小段〔ノット〕をもとに、16世紀後半の祝詞の旋律を考察する」（昭和音楽大学研究紀要、第37号）では、能の〔ノット〕と呼ばれる小段に、古い祝詞の名残があると推測し、江戸初期ころの楽譜や型付けから〔ノット〕の様相を探った。16世紀の下間少進節付本に記された五声（階名）をもとにその旋律を考えた。この謄本からは、5度程度の跳躍進行を持つ能としては特殊な旋律を持っていたことを明らかにした。

祝詞は歌というものの起源の一つである。4年間の研究を通じて、かつての祝詞は、声明などのような外来の漢文を読み上げるものではなく、日本語の文章を聞く者いかに伝えるかに関して、簡素でありながら基本的な要件を備えつつ、時には豊かな旋律をつけて唱えられていたことが明らかになった。

### 2、能の楽譜研究

室町末期から江戸期の能の楽譜研究として、2019年2月に第7回湘南ひらつか能狂言にて上演予定の《虎送》の復曲検討会（能楽師加藤眞悟師の主催）に参加し、節付担当として復曲を行っている。

《虎送》が復曲されることになった直接の契機は、登場人物である虎御前が上演予定地である神奈川県ゆかりの人物であることによるが、それだけではなく、この曲がこれまで最古の能番組である興福寺別当坊猿楽の「応永三十四年演能番組」に記された《曾我虎》と推定されてきた曲のひとつであり、現在演じられなくなっているものの歴史的に重要な曲であるとの判断に基づく。

節付の底本としては、江戸初期の『石田少左衛門盛直節附本』（法政大学能楽研究所所蔵）を主に用いている。この謡本は、江戸期を通じて節付のスタンダードとなった『元和卯月本』（1620）の関係者により記されており、現在残る諸本のなかで、もっとも信頼性が高いと判断した。また室町末期に関する研究成果を援用しつつ（論文「『塵芥抄』呂律之吟に関する廣瀬政次の論の再検討——室町末期のツヨ吟とヨワ吟」）、観世元頼節付本などの室町期の謡本も参照している。

復曲の結果は、能楽師加藤眞悟氏を中心とする平塚市文化財団主催の能楽公演での上演のための謡本として出版の予定である。

◆関連する執筆

- \* 2017.8 「『塵芥抄』呂律之吟に関する廣瀬政次の論の再検討——室町末期のツヨ吟とヨワ吟」『東洋音楽研究』第82号、東洋音楽学会編、pp.15-26。
- \* 2018.3 論文「能の小段〔ノット〕をもとに、16世紀後

半の祝詞の旋律を考察する」昭音楽大学研究紀要37号。

◆関連する口頭発表

- \* 2017.11 「真言宗南山進流の明神講式から祝詞の旋律を考える」東洋音楽学会第68回全国大会、沖縄県立芸術大学。

## 前島 美保「歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究」

本研究は、近世から近代にかけての歌舞伎囃子を伝える劇書と伝書という二つの史料群を調査・収集し、既出史料の見直しと新出史料の検討を通じて、歌舞伎囃子の史料研究の基盤を整備し、伝承のあり方を考察することを目的とする。2016年度より科学研究費基盤研究（C）の助成を受け研究を進めているが、2017年度は『演劇拍子記』（早稲田大学演劇博物館所蔵）とその類書に焦点を当てた。

『演劇拍子記』は、明治四十年春、囃子方六合（郷）新三郎によって筆写された冊子本（一冊）で、囃子名目241項を列挙し、その用法や使用楽器等を時に朱筆で書き込みしながら詳細に記してある。来歴ははっきりしないが（筆写奥書には「原本きれ／＼二なりし故改置」とある）、書名や序詞の署名（「慶応四ノ年弥生 四世桜田劇文堂主人」）、列挙された囃子名目等からは、三世桜田治助著として知られる『拍子記』との関連がまず想起される。『拍子記』は、治助原本は不詳だが、川尻清潭が昭和15年7月『演芸画報』に「芝居なんでも帳」（一）として掲載し、のちに『芝居おぼえ帳』（国立劇場調査養成部・芸能調査室、昭和53年）に再録されたものが広く知られている。その他にも、望月太意之助『歌舞伎の下座音楽』（昭和50年）に掲載された『拍子記』（「文久二年刊」とする）、伊原青々園が昭和9年に写した竹柴進三（其水）筆写本『拍子記』（早稲田大学演劇博物館所蔵、明治三年ノ午序）等、『拍子記』の諸本はいくつか存在するが、囃子名目の立項順には多少異同があるものの、項目数は約120と諸本間でほとんど変わらない。ただし『演劇拍子記』と比較すると、項目数の点で大きく異なる。一方、川尻清潭が昭和15年9月『演芸画報』で紹介した『美都拍子』というものが別があり、こちらは226項目、立項順も『演劇拍子記』に近い。また『美都拍子』の序詞署名に「劇文園主人」とあることから、『美都拍子』と『演劇拍子記』の関連性を窺い知ることができるが、これら一連の史料の来歴や影響関係、系譜等については、今後さらなる検討の必要がある。

『演劇拍子記』で興味深いのは、六合新三郎自身が注記を加えている箇所、主に狂言作者に伝えられた『拍子記』諸本や『美都拍子』との違いがここにある。例えば、「音楽」の箇所に「常二用ゆ処は越天楽ヲ用ゆ」と書き込みがあるが、現在の「音楽」とは異なる用法である。むろん故実に通じた新三郎であるので実態に即しているかは難しいが、少なくとも明治末年時点で知る人もあった演出法だったとは言えるだろう。このように、現在の歌舞伎囃子の用法に定着する以前の姿（あるいは見失われた用法等）が『演劇拍子記』には散見されるが、こうした各項目の詳細な検討も今後の課題として残されている。



◆関連する執筆

- \* 2018.03 論考「第五章 篠原踊りの研究史—初期歌舞伎・三味線組歌との関連から—」、『篠原おどり解説書—歌と踊りの歴史 2018—』、五條市文化遺産活用実行委員会

◆関連する発表等

- \* 2017.12.10 前島美保・鎌田紗弓・土田牧子「『演劇拍子記』をめぐって」、平成 29 年度歌舞伎学会秋季大会、早稲田大学
- \* 2018.01.04 ~ 06 *Sumo and Kabuki in Early Modern and Modern Period*, Japan Studies Association, Hawaii